

「世界」は「わたし」を広げた先に

兵庫県加古川市立 志方西小学校 小柳一矢人

1. はじめに

兵庫県加古川市社会科教育部会では、「未来につなぐ社会科学習ー地域社会に豊かに関わり主体的に追究していく子どもー」を研究主題とし、地域との関わりを重視し、様々な学習活動や体験活動から主体的に学びを追究していく児童の育成を目指している。

本校は兵庫県加古川市志方町にある、学級数6、児童数112名の、市内で2番目に小さい規模の学校である。加古川市最高峰の高御位山が校区内にあり、その麓に広がる播磨平野を潤すための大小30を超えるため池が点在する。地域は非常に協力的で、サツマイモ栽培、イチジク栽培、米作りをはじめとする農業体験などに積極的に関わり、地域で子どもを育てるといふ温かみあふれる環境である。また、令和元年度から6年間、県民局の事業として「『ため池』ふるさと教育プログラム」の活動に取り組んでおり、今年度はその4年目である。地域の特性を生かした「ふるさと学習」を活発化させており、地域を愛し、地域を大切にす心育成に努めている。

2. 研究の視点

研究にあたって過去2年間の第6学年の実態を精査した結果、「地球規模の課題の解決と国際協力」が他の単元と比較して習熟度が低い傾向にあることがわかった。これは「地球規模」、「国際協力」といったことが児童にとって身近なものとして捉えにくいためではないかと仮説を立てた。そこで、本研究では本校の特色である「ふるさと学習」とうまく結びつけることで課題を解決できないか探ることとした。

3. 研究の実際

(1) 単元名

「地球規模の課題の解決と国際協力」

(2) 単元の目標

・グローバル化する国際社会における日本の役割について理解するとともに、地図帳や地球儀、統計や年表などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能を身につけるようにする。(知識・技能)
・国際社会における日本の役割や地球規模の課題の解決に向けた取り組みの相互の関連や意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを説明したり、それらをもとに議論したりする力を養う。

(思考・判断・表現)

・国際社会における日本の役割について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、平和を願う日本人として世界の国々の人々とともに生きることの大切さについての自覚を養う。(主体的に学習に取り組む態度)

(3) 指導にあたって

児童は、第4学年時に社会科で通潤橋建設に尽力した布田保之助を題材とした「きょう土につたわるねがい」を学習している。その後、総合的な学習で「ふるさと学習」の一環として、近隣のため池について調べ学習に取り組んでおり、通潤橋同様に地域の治水問題解決と住民の生活向上を目的として作られたことを結び付けて学習することができた。第5学年時には社会科で我が国の産業について学習しており、生産性や品質を高めるだけではなく、世界規模の観点や将来的な観点から持続可能な産業の研究、実現に取り組んでいることを学習している。特に「増え続ける海外生産」では、国内企業にとってはコストを抑えるために、現地にとっては技術の伝達、雇用の創出、原材料や部品の調達による周辺企業の振興のため

に、というように、両者にとってプラス面があることを学習した。本単元の学習前アンケートによると、日本が国際的に貢献していることについて知っている児童は少なく、ユニセフ（24人／29人）やNGO（18人／29人）やODA（0人／29人）の存在や活動内容を知っている児童は限られていた。これら3つの組織は教科書では小単元で取り上げられているものであり、これらの認知度の低さから「国際貢献」が児童にとっては身近なものではないことが読み取れる。

本単元は、地球規模で発生している様々な課題の解決に向けて、国際社会の一員であり、平和を願う日本人として、世界の国々の人々とともに生きることの大切さについての自覚を養うことを目標としている。第4学年時では「自分の地域の発展」を目的とした取り組みを学習し、第5学年時では「自国だけではなく相手国にとってもお互いに有益」というように、学年の発達にもなって益を得る対象が広がっており、多角的な視点で発展を捉えてきた。さらに視点を広げ、国際社会における我が国の役割を考え、理解する単元である。

指導にあたっては、「世界」と「自分」を並立の関係として捉えるのではなく、「世界」を「自分」の広がりや延長上として捉えることができるかどうかを重要であると考えた。そこで、令和3年10月に環境活動家の谷口たかひさ氏を講師に迎え、SDGsについての講話を聞いた経験や、11月に静岡大学教育学部が実践する「プロ学」でFUJITSUの専門家が講師として参加し、省エネについて学んだ経験を想起させた。

また、第2次、第3次、第4次においては、ユニセフや国際連合、NGO、ODAといった様々な組織について学習していく。学習前アンケートでは、新聞やニュースなどでこれらの組織を耳にする機会は多いが、具体的なイメージを持っていない児童が多かった。いずれの組織についても、よりよい社会の実現に向けて活動しているという点で共通していることを押さえつつ、それぞれの組織の特徴や運営母体を明確にすることで、混乱なく知ることができるのではないかと考えた。そこで、第1次で登場する「ペシャワール会」と関連付けたり、具体的資

料をグループ分けしたりすることで理解の手助けとした。事前に準備する資料をそろえておくことは、第5次、第6次の発展学習となる調べ活動においても思考の手助けとなるのではないかと考えた。

さらに、第5次、第6次においては、地球規模で発生している課題解決の方法を思考する際に、一時的なものではないか、別の視点からとらえたときに様々な影響が発生しないか、といった多角的な捉え方が重要となる。第1次の思考を手がかりとし、自分が考える方法の長所と短所を分けて整理させることで、持続可能な社会を実現させるための方法となりうるのかを判断させた。

今後、グローバル化はますます進んでいくことは明白である。学習を通して、お互いの権利を尊重し、将来の世代のことも考えながら、ともに助け合っていく国際社会の一員として、地球規模で発生している様々な課題の解決に積極的に参加しようとする態度を養えるように単元設定した。

（4）単元計画（全9時間）

第1次（2時間）

平和や環境を守るために、世界各地で日本人がどのような活動をしているのかを調べ、日本の国際貢献について学習課題をつくり、学習計画を立てる。

第2次（1時間）

世界の子どもたちの健康や安全を守るユニセフの働きについて調べる。

第3次（1時間）

世界の人々の平和と安全を守る国際連合の働きについて調べる。

第4次（1時間）

地球環境を守りながら、持続可能な社会を目ざしていくために、世界の人々が協力して取り組んでいる事例について調べる。

第5次（2時間）

現代に残されている課題に目を向けながら、国際社会の一員として何を大切にしていけばいいか話し合う。

第6次（2時間）

学習を振り返り、誰もが安心して生き生きと暮らせる世界の実現に向けて、これから実行したいことを考え、表現する。

（5）評価規準

【思判表】＝思考・判断・表現

【知技】＝知識・技能

【態】＝主体的に取り組む態度

第1次

【思判表】世界で活躍する日本人の活動から、問いを見出し、学習課題として表現している。

【態】学習課題について予想や学習課題を立て主体的に追究しようとしている。

第2次

【知技】ユニセフの活動とその意味から、子どもたちの健康や安全を守るためには、国際協力が必要なことを捉えている。

第3次

【知技】世界の平和と安全を守るために、国際連合がさまざまな活動に取り組んでいることや、日本が果たしている役割を理解している。

第4次

【知技】環境問題を解決することの大切さや世界の人々が協力することが必要であることを捉えている。

第5次

【知技】すべての人の人権が尊重され、誰もが安心して生き生きと暮らすことのできる社会の実現に向けて、国際社会の一員として協力することの大切さを捉えている。

第6次

【思判表】学習したことをもとに、国際社会の一員として、自分がこれからどのような行動をしていくべきか、選択・判断し、表現している。

【態】国際社会の一員としての役割について学んだことや考えたことを、これからの社会に生かそうとしている。(発)(行)(ノ)

(6) 本時について

県民局の事業として取り組んでいる「ふるさと学習」では、地域の積極的な協力も受け、児童は自身にとって身近なこととして主体的に学びに取り組む姿勢が見られる。毎年度末に実施する「ふるさとアンケート」においては、「(自分が暮らしている) 志方町が好き」という回答が95%以上を占めていることから、目的に近づきつつあることが裏付けられる。一方、本単元は「世界」、「地球規模」というキーワードが散見される。これらは「地域社会」や「ふるさと」からは一見対極に見える。児童が主体的に

学ぼうとするためには、いかに身近なこととして捉えさせることができるかが重要である。そこで、児童の過去の学習活動や体験活動を想起させることで本単元との紐づけを図った。本単元は導入部で中村哲医師のアフガニスタンにおける活動を紹介しているため、「水」、「環境」というキーワードと、最重要事項として「持続可能な社会」を意識できる授業づくりを行った。

①「水」

先に述べたように、本校校区は農業用のため池が大小30以上点在する。4年時の総合的な学習では地域のため池の歴史や構造、自然環境や防災といった視点からの実態や活用法など、様々な角度から児童各々が課題設定し、調べ活動に取り組んだ。重機のない江戸時代に、地域の庄屋、神吉久太夫の指揮のもと、主に人力だけで24万6500m³の貯水量を誇る巨大なため池を築造し、地域一帯に用水路を張り巡らせたことを学習した経験や、牛乳パックを使って運動場に50mのミニチュア用水路を作った学習経験により(写真1)、中村哲医師のマルワリード用水敷設工事を身近なこととして捉えさせることができた。



【写真1：ミニチュア用水路敷設】

②「環境」

コロナ禍で校外学習や地域の方々をゲストティーチャーとして招いての体験学習が制限される中、10月に環境活動家である谷口たかひさ氏を招いて行った「地球を守ろう」という講演会では、地球上で起こっている気候変動についての話を聞き、自身の行動が環境を守ることにつながる意識を高めることができた。また、11月に静岡大学教育学部が実践する「プロ学」でFUJITSUの専門家に講師として参加していたいたりリモート授業(写真2)では、少し

の工夫と少しの不便が大きな省エネにつながることを学んだ。これらの学習活動を想起することで、地球上の環境は自身の生活の延長上にあることを捉えさせることができた。



【写真2：『プロ学』リモート授業】

③「持続可能な社会」

単元導入部の中村哲医師の活動については、教科書上ではアフガニスタンでの活動について重点的に取り上げているのみであった。そこで、パキスタンでの活動を紹介し、ハンセン病の痛みを和らげる対症療法だけではなく、予防のためにサンダルをはく生活を根付かせたこと、さらにそのサンダル生産を、発病による差別のために失業してしまったハンセン病患者に依頼することで職を用意するなど、中村医師が去った後も成立しうる「持続可能な社会」が構築されていたことに気付かせることができた。その後、アフガニスタンに活動の場を移してから、目の前の食糧不足を乗り切るために15万人分の小麦粉と油を配給するだけでなく、井戸掘りや水路敷設によって安全な水を確保するなど「持続可能な社会」を構築しており、本単元を通して「持続可能かどうか」という視点で捉えさせるきっかけを作ることができた。

4. 成果と課題

単元の学習前は認識率の低かったNGO、ODAといった組織についての理解を深めることができた。毎時間後の授業のふりかえりにおいて「4年生のときに用水路を作ったことを思い出しました。」「わたしたちは失敗したけど中村さんは成功させて65万人の命を救ったことはすごいです。」といった内容の記述が複数の児童から見られたことから、これまでに学んできた「ふるさと学習」をうまく結びつけることができた

結果であると考えられる。その一方で、単元の導入部が2月最終週であり、第5次、第6次で取り組んだ「わたしが考える地球の課題解決」では、十分に調べ活動の時間を確保できなかった。それに加え、そもそも国際社会で取り上げられている課題の解決方法を6年生が考えて提案するというのは難しく、十分に学習を深めたとはいえない。学習を前倒しして授業時間を確保するなどの工夫が必要であるといえよう。単元を通して、「持続可能かどうか」という視点で捉えることを意識させた結果、本単元の学習に限らず、5年時に学習した農業、漁業、工業といった産業、水のめぐりや自分の家の自動車といった身の回りの生活についても「持続可能かどうか」という視点で見つめ直すことができるようになった。本研究においては主たる目的として設定していたわけではなかったが、今後のあらゆる学習活動におおいに生かされるものとして定着させることができたといえる。

本校では各学年において、教科横断的な視点で教育内容を組織的に設定できている。だが、学年を越えての系統的な学習については、まだまだ十分ではない。今回の実践を通して、系統的な学習については、概念的な部分における繋がりを意識しながら、発展的に取り組むことができたことは最も大きな成果であるといえる。今後はさらに本校の特色である「ふるさと学習」を一本の柱として据え、児童の課題を捉え、学校教育目標の実現に向けて教科横断的かつ、系統的な視点でカリキュラム・マネジメントに取り組んでいきたい。

「地球規模」、「国際協力」といった、児童にとって身近なものとして捉えにくいことを、いかに身近なものとして結びつけることができるかが本研究の焦点であった。関連する既習経験と結び付けることで、児童が感じる「身近なこと」の枠を広げていき、それが世界につながっていくことを捉えさせることができた。「ふるさと学習」を充実させることは、地域を愛し、世界を愛する心の育成にもつながる。今後も世界の課題に目を向け、積極的に関わろうとする子ども育成に努めていきたい。